

実習に役立った授業とその内容

—実習直後の学生へのアンケート結果より—

榊 原 博 美

要 旨 本稿は、幼稚園教諭・保育士養成を担う短期大学における日常の講義を実習との関連で生きたものにするため、非常勤講師として幼児教育や保育の実習とは直接関連のない「教育制度・政策論」を担当する筆者がその客観的な立場および、幼児教育学科2年の学生にとって筆者の授業の開始が幼稚園教育実習直後であることを活用して、授業第一回目のオリエンテーションの際にその時期における学生に対してこれまで受講した中で実習に役立ったと思われる授業とその内容などについて記述式で回答するアンケートをおこなった結果をまとめたものである。

abstract

To make practical the lectures of a junior college bringing up kindergarten teachers and nurses in association with practices, the author, a part-time lecturer of education system and policy, made a questionnaire survey about the past classes and their contents that they had felt useful as of the first class orientation. In conducting the survey, the author made use of her objective position and the timing that the start of her class was immediately after the exercise of children's education.

1. はじめに

幼稚園教諭および保育士養成において実習の重要性はますます高まっているといえる。それは養成校において学生が専門的な技能を実践的に獲得するために重要かつ多大な影響を及ぼすものであり、幼児教育・保育の現場においてその実践を観察・体験することによって専門職としての幼稚園教諭・保育士などの仕事に関する具体的な理解と自覚を深め、実践的な能力を身につける機会にもなる。それゆえ大学、および短期大学などの保育者養成校での実習指導は直接それを担う科目だけでなく周辺の科目も含めて系統的・効果的に設計されなければならない。筆者は、本学では「教育制度・政策論」を担当している。この科目は幼稚園教諭2種免許取得に対する選択科目である。内容的には学校教育を中心とした教育制度や教育政策、教育法規について扱っているが、本学が保育者養成校であることに鑑みて幼児教育政策についても講義解説している。しかしながらこれまでは理論が中心であって実践的な内容にはなりにくかった。とくに実習に対する関連をもたせることがやや困難な科目である。

そこでこのような科目を担当しているという客観的な立場と筆者の授業開始時期が幼児教育学科2年生の幼稚園教育実習終了直後であることを活用することで、その時期における学生に対して（実習での体験が即座に思い浮かぶ状況で）、これまで受講した授業の中で実習に役立ったと思われるものとその内容などについて記述式で回答するアンケートを実施した。その際「実習指導」を冠する授業については当然実習を意識した内容になっているとの前提から、調査対象からは割愛した。直接「実習指導」を冠しない科目でどのような効果があったのかについて調査した結果となっている。科目名など学生が記述したとおりのものを掲載してある。どの科目が効果的であったかについて特定することが目的ではなく、そこで展開された内容を重視するためである。

2. 方 法

幼児教育学科2年生のA・B・C・D・K・L組の学生全員（有効回答数231人分）に対して次の項目でのアンケートを配布し自由に記述してもらって回収し回答の頻度や内容について分析した。以下に実施したアンケートの項目を示す。

<アンケート項目>

タイトル：実習に関するアンケート（今後の短大教育における普通の講義を実習との関連で生きたものにするため皆さんの意見を反映する目的です。）

- ①これまで受講した中で実習に対して効果的だったと思われる授業とその内容
- ②実習を成功させるためにこんな授業を受けていたらよかった（今までにはなくても今後あったらよい）と思うような内容
- ③実習で困ったこと（後輩に対してこんなことに対するこういう準備が必要であると伝えたいようなこと）
- ④実習から学んだこと

3. 結果

（1）アンケート項目①の結果

日常の授業と実習との関連を調べるため①に挙げられた授業のうち実習指導を直接目的とする「保育実習」「教育実習」などは分析から除外した。それらを除いたもののうち回答数の多い順に示すと、「幼児音楽」→121、「パフォーミングボディ」→62、「児童文化演習」→54、「保育内容（表現）」→52、「指導法の研究」→34、「乳児保育Ⅱ」→33、「保育内容総合」→10、「児童文学」→10、「小児保健」→10、「幼児体育」→9、「保育内容総論」→7、「保育内容（環境）」→6、「レクリエーション」→4、「教育心理学」→4、「保育内容（人間関係）」→3、「発達心理学」→3、「養護原理」→3、「総合演習」→3、「小児栄養」→2、「すべての授業が役に立った」→2、「保育原理」→1。

以上のように、アンケートに掲げられた科目の種類は全部で20科目におよんだ。

回答の最も多かった「幼児音楽」の内容としては圧倒的にピアノの実技を掲げている。実習で弾き歌いが求められることからこの授業での練習がもっとも役に立ったと感じている学生が多数を占めた。「この授業で弾き歌いを毎日練習したから子どもたちの前で緊張せずにできた」「幼児音楽では季節に合った幼児曲や子どもをひきつけるような弾き方歌い方などを教えてもらったので役に立った」などの意見や「あさのうた・おべんとうのうた・かえりのうた、など実際にならった曲を弾き歌いできたのでよかった」「季節の歌を意識してやっておいてよかった」など具体的な曲や効果的だった曲を掲げているもの、「手遊びや幼児曲を子どもたちが喜んでくれ

た」「朝の会など子どもを集めたくても声をかけてもなかなか集まってくれなかったがピアノを弾いていると少しずつ集まって、歌うと全員集まってくれた」など保育場面で手遊び歌や弾き歌いがさっそく効果的であったという感想が述べられた。

次に多かったのが「パフォーミングボディ」である。この授業の内容としては身体表現、音にあわせてリズム表現、発声練習、手遊びを学生同士で紹介、などが掲げられている。感想としては「手遊びやゲームが実習に役立った」「身体表現で動きが豊かになった」「誰の前でも自分を表現できるようになる」などがみられた。自分が手遊びやゲームを実際に体験していることは実習に効果的である。体を動かすことで自己表現することは自己開放にもつながっているようである。それが実習でも生かされたと把握することができた。

3番目の「児童文化演習」ではパネルシアターづくり、絵本や紙芝居の読み方、折り紙での製作やハンカチ遊び、アンパンマンサンサン体操、キャラクター折り紙など多様な内容が掲げられた。「たくさんの絵本に出会えてよかった」「子どもの間で、はやっているキャラクターについて知ることができてよかった」などの感想がみられた。

「指導法の研究」では「指導案の書き方が役立った」という回答が圧倒的であった。実習では指導案を書くことに苦労するというのがよく聞かれる感想である。事前に指導案の書き方に習熟しておくことは実習に対して非常に効果的であることがわかる。

「乳児保育Ⅱ」では、手遊び、かんたん手作りおもちゃづくり、ペープサートづくり、などの具体的な内容に加えて「子どもの様子に合わせた対応方法を教えていただけるとても役に立った」「先生の現場での体験など実習でどのように動けばよいか話を聞いたこと」「保育者として人としてどうであるかを教えていただき自分をみつめなおすよい機会になった」などの感想があり担当教員の体験などが実習で役に立っていることがわかる。

「保育内容総合」では、ペープサート・紙芝居、人形や絵本作りなどが挙げられている。「実際に実習で活用できるものを作れた」「何歳児でははさみがどれくらい使えるか、何枚の紙芝居なら集中できるかの目安を教えてもらった」という感想があった。これらは事前に幼児の能力の目安を知っておくことが効果的であることを示している。

「児童文学」では「たくさんの絵本を紹介してもらった」という感想が非常に多かった。

いろいろな絵本について知っていることは保育者にとって重要である。授業を通じてこれらの知識や実際の絵本に触れておくことが実習でも役立つというようだ。

「小児保健」では「子どものけがの手当て」について挙げている。「子どもの注意すべきけがや病気を知ることができた」という感想も多い。

「幼児体育」では、付属園の子どものかかわり、体を動かしてみんなで遊ぶ、などの内容である。「遊びの種類や指導の仕方を学んだので一緒に遊べたり補助したりできた」という感想があった。実際の遊びを体験しておくことが効果的だということがわかる。

「保育内容総論」では指導案の書き方、が挙げられており、実際に書いたことで困らずに書くことができたという。また担当教員が「自分が園で体験したことを話してくれて子どもの姿のイメージなどがわき実際の実習に行ったときなど『この場面か!』と思うことも多かった。そのとき先生に教えてもらった対応を思い出し落ち着いてすることができた。」という感想があり、やはり教員が実体験について話すことは実習現場で非常に役立つものであることがわかる。

「保育内容（環境）」では動植物について、季節のあそび、実際に近くの公園まで行き園外保育を実践したりした、などが挙げられた。園外保育の経験のおかげで「実習で何に気をつけなければならないか大体わかった」という感想が述べられた。

「レクリエーション」で挙げられたのはさまざまな手遊びであり、手遊びをいろいろ身につけていることが実習では非常に役立つようである。

「教育心理学」「発達心理学」など心理学系の科目ではすべてが障害児に関する内容が実習に役立ったと答えている。統合保育などで障害のある子どもに接することも多いため授業で学んだことが障害児理解につながったようである。これは「養護原理」でも同様で、児童養護施設についての内容を掲げるほか「障害のある子どもたちの理解と接し方について勉強になった」という感想が述べられていた。

「保育内容（人間関係）」では「年齢ごとの発達がよくわかる」という感想。「総合演習」ではたくさんの絵本の紹介、「小児栄養」では生活に役立つ情報、という内容が挙げられた。「保育原理」では「先生の体験談が役に立った」というものだった。保育原理など理論系の科目であるが、授業の内容というよりも、ここでも教員の実体験に関する情報が実習では

役に立つことがわかった。

全体的にいえることは、現場で行われていることのリハーサルにあたる行動を授業で実地に行っておくことがまずはもっとも役立つ内容であるということである。その他知識として知っておく必要があることを扱っている内容や教員の経験に基づいた話が現場で直接役立つことがわかった。これらから通常の授業では技術面、知識面、を扱うことに加えて、できるだけ教員が現場で実際に体験したことを伝えていくことが効果的であるということがいえるのではないだろうか。

（2）アンケート項目②の結果

②に掲げられた内容を分析した結果、共通しているのは①の結果とも重なるが、事前に現場で行われていることのリハーサルにあたるような内容を体験しておくような授業を希望していることがわかった。例えば「事前にもっと子どもと実際にふれあえる場があるといい」「いろんな遊びを実際にやって発表しよう」「学んだことを生かすというより思い浮かぶのは体で覚えたりしたものなので実際にできる手遊びや遊びを学びたい」「紙芝居や絵本の読み方の授業」「体育、鉄棒などの補助を実際に経験したかった」「障害をもった子に対する接し方(詳しく)」「ペープサート、パネルシアターをつくる」「自分がやる部分実習、半日実習、1日実習の計画の立て方」「幼児の特徴を年齢別に詳しく知るような授業」「指導案の書き方」「何かを作って発表するような実践的な授業」「現代の子ども文化(アニメなど)の研究」「いろいろな手遊びや遊びを教えてくれる授業」「ペープサートやエプロンシアターなどを作って発表し改善点などを話し合う授業」「実際に研究保育を発表させる授業」「ひとりひとりが指導案を書けるようになるまで指導してくれる授業」「トラブルなどへの対処法について実際に起こったことなどを挙げながらすすめていく授業」「手遊びなどの導入の部分についてどのようなものがあるかや行うときのポイントについて、子どもとの関係を築いていき次の動きにスムーズに入っていけるような導入の仕方」「導入から終わりまで一通りの保育例を見たい」「保育園や幼稚園でやる体操をやる」「皆が子ども役になり一人だけ先生役をやる授業」「ミニ運動会(模擬)」「他校の実習生がマジックを授業で習っていて実習で子どもに喜ばれていたのでマジックなど子どもをひきつけられるようなことを学びたい」「実習先でのマナーを教える」「もっと定期的に子どもと関わられるような授業」

など。

また、「先輩から体験談をきけるうえに質問もできるような授業」「先輩のこれまで行ってきた指導案の参考例（成功・失敗）から学んでいけるようなもの」「保育者の体験を聞くことができるような授業」などの意見も多かった。やはり経験談は貴重であるし、質疑応答ができる機会も求められている。その他「ディベートでそれぞれの保育観を問うようなもの」などさまざまな要望が出された。

「①で掲げた授業でよい」「今のままでよい」「保育内容（表現）をもっと受けたかった」「パフォーマンスの授業は受けておくとよい」などの意見もみられ、本学の指導がおおむね満足のものであることがわかった。

（3）アンケート項目③の結果

③では指導案に関するものが圧倒的に多かった。やはり実習では指導案を書くことが不可避に求められるので指導案を実際に何枚も書いておくことをすすめているものが大半を占める。その他、「子どもたちへのプレゼントや研究保育の材料を事前につくっておく」「手遊びのレパートリーを増やしておく」「ピアノは日ごろの積み重ねが大事」「楽しく実習するような気持ちの準備」「絵本をたくさん知っておく」「教材準備の時間がないので1年のうちに準備すべき」「製作に必要な材料を日ごろから集めておく」「部分実習の主活動を決め準備しておく」「植物の名前を言えるようにしておく」とよい、「人や動物などの簡単な絵が描けるようにしておく」とよい、「アニメキャラクターなどの流行について知っておく」など事前の準備をしておく必要を述べるものは多い。またマナー関係で「実習園の先生とのコミュニケーションが重要なのできちんとした言葉遣いを身につけておく」とよい、「あいさつと何か手伝うことがありますか？という積極性はとても大事」「ハタキのかけ方や用具の使い方など掃除の仕方は再確認しておいたほうがよい」「誤字脱字が多く、先生に指摘されたことがあったので日ごろからきれいな字を書くようにしておくこと」「保護者とのかわり」などが挙がっていた。

実習で困ったこととして出されていたのが「子どもの名前がなかなか覚えられない」「ことばかけで困った」「運動会の練習ばかりだったので遊戯を覚えるのに苦労した」「先生方から違うことを言われどちらの先生に従えばよいかわからないというときが時々あった」「障害をもつ子への接し方」「困ったのは1人で30人の子どもを任されたこと」などである。

後輩へのアドバイスとして、「注意されたことは改め、ほめられたことは続けていくといい」「わからないことは積極的にきく」「一日実習の主活動は事前訪問後すぐに考えるとよい。実習担任、延長と一日実習の主活動についてよく話し合う」「どこでも障害がある子がいると思うのでその障害についての知識はもっておくべき」など事前の周知な準備が実習を成功に導くものであるという意見や、「辛いことがあっても笑顔を忘れずに」「日ごろから規則正しい生活をする」「体調管理をしっかり」など付け焼刃でなく日ごろの生活自体を整える必要をすすめるような体験にもとづく生きたアドバイスが多かった。いずれにしても早めの準備や事前の準備を強調したものが大半であることから、1年次からの周知な準備が実習をよりよいものにするには間違いない。

（4）アンケート項目④の結果

この項目の結果はさまざまである。各人が実にいろいろなことを学んでいることがわかる。もっとも多かったのは、「一人一人の子どもを理解することの大切さ」「一人一人にあった対応をすることが必要である」というものである。次に多かったのは「言葉かけの大切さ」で、言葉かけで子どもの様子かなり違ったものになることを実習で実感している様子がうかがえる。その他、「環境を整えることの大切さ」「笑顔で接することの大切さ」「掃除の大切さ」などを挙げているものもある。また、「保育者の関わり」「保育者という仕事の重要性」「保育職のやりがいや楽しさ、大変さ、責任の重さ」など保育者というものがどのようなものであるのかについてを学んでいるものも多い。「実習でないとその時々の子どもの姿は学べない」と、講義だけでは学べないことが実習では学べたということを実感として受けとめている学生が大半を占めている。「やりがいのある仕事だと実感した」「なりたいという気持ちが高まった」など実際の保育者の仕事を体験したことが将来の職業選択への意欲をより高めていることがわかる。これらから、改めて保育者養成における実習の重要性を確認することができた。

4. まとめと考察

調査の結果、本学における特別に実習指導を直接の目的と掲げていない科目についてそれがどのくらい実習に対して効果的であるかについて、実に多くの授業科目が挙げられていることや、すべてが役に

立っているなどの意見の存在からも、客観的な立場である筆者には現場で役立つ授業が多彩に展開されているということが把握できた。学生が述べた感想からは、現場でさっそく求められる技術的な面での力量を日常から形成することに資する授業内容が効果的であったことがわかった。とくにピアノと歌、手遊び、ゲーム、絵本、紙芝居、折り紙、パネルシアター、エプロンシアター、ペープサート、などについてより多くの経験と知識、技能、材料を蓄積しておくことが必要であるという。

その他では指導案を何枚も書く、どの年齢のどの場面でも書けるようにしておく、前もって書いておく、など指導案の書き方についての内容が効果的であり求められることがわかった。

知識面では、障害児や疾病についての知識を持って現場に臨むことの重要性を実感していることから、心理学や保健に関する授業内容の必要性が確認できた。

また、実際の子どもと接するのが実習ではじめてとなるのではなく、定期的な実際の子どもと接する機会を取り入れてほしいという声も多かった。それが難しい場合にはビデオでもいいので観ておきたいという意見もあった。

さらに直接の授業内容というよりも、担当教員の実体験にもとづく経験談を聞くことや先輩の体験談を聞くことが非常に有効であるということがわかった。理論系の科目ではその内容よりも教員の経験談の方を学生は役立ったと感じているようである。これらから教員は積極的に自己の経験を授業で語っていく必要があるということがいえるのではないだろうか。

その他マナーや生活面に関することも、急に実習の場になったからといってできるものではない。これらは大学・短大などの高等教育機関の授業で扱う内容であるかどうかは議論の分かれるところであるが、教員がまずは自分の行動で示し学生の手本となれるようにすることが望ましいと思う。

このような結果を受け、今後は筆者自身が担当する授業でも可能な限り生かしていきたい。具体的には授業内で現場の様子が把握できるようなビデオの視聴を取り入れることや、自身の体験談・経験談などをまじえて理論を展開していくことである。また提案したいのはそれぞれの科目を担当する教員同士の意見交換・情報交換である。シラバス以外で他の教員がおこなっている授業の内容についてうかがい知ることはあまりこれまでできなかったのではない

だろうか。筆者自身も可能であれば見学・参加したいような授業は多い。本学ではここ最近授業をお互いに公開するシステムは導入されてきているがすべてに参加することは残念ながらできない。総合的に見て保育者の養成がより計画的・系統的・効果的なものになるよう、どの授業がどの面を受け持つというような役割分担を明確にして補足効果や相乗効果をあげていくことができるような授業構成になることを今後期待したい。